

## Mt. Whitney 登山記録

8月28日（水）

朝7時30分に予定通り小川弘子先生はご主人の車で我が家の前に。小川先生と一路ローンパイン（210マイル）に向けて出発。天候もよく、平日にもかかわらず道路の混雑は無く一路北へ。途中一度の休憩もなく、ローンパイン Visitor Center へ直行。集合予定の1時より早く、正午前に到着。皆を待つ間、山の天気予報など情報を仕入れる。30% Rain and Storm と出ている。毎日11時以降の降水確立高し。小川弘子先生、晴れ女と自称され、その言を信じる。Visitor Center より眺める Mt. Whitney を含むシエラネバダの山々は真夏の太陽に照らされ青空の下くつきりと浮かび上がっている。時に熱風が山から吹き降ろす。やがて、細湊巖、永川文一両氏到着。早速、登山のレジスターを済ませ、キャンプ地での Human waste 用ビニール袋をもらい、Bear Can をレンタルする。

今夜の泊まり場所、Best Western Frontier Motel にチェックイン。ここは一昨年にも来たところ。レーバーディウィークエンドに向けて、外国からの泊り客も多し。チェックイン後、小川先生の部屋に集合してオニギリ作成の開始。翌日の朝、晩、更にその後の食事用。

夕飯はローンパイン唯一の高級レストラン（？）で壮行会を行うも、早めに済ませて、明日の早朝出発に備える。

8月29日（木）

朝5時モーテルのレストランで朝食後、5時30分にはホイトニーポータル（上り口）に向けて一台の車で出発。ブチ隊長、ドクター永川の二台はモーテルに残置。

ポータルの Over Night 駐車場は満車。Overflow 駐車場へ停める。

軽く柔軟体操を行い、6時30分トレイルキャンプに向けて登山開始。

早朝のため駐車場、登山道ほとんど人影なし。

始めは緩やかな登り道のため、体調を整えながら、トレイルキャンプまで6マイルの道を頭に描きながら、斎藤・小川・永川・細湊の隊列で森林の中を黙々と進む。

途中、North Fork Lone Pine Creek の瀬を置き石伝いに渡る。道は徐々に急峻になって高度を稼ぐためのジグザグ道を登る。この辺りが第一の関門。

第二のクリークは8本の丸太の上をバランスを取りながら渉る。一昨年来た時は、このクリークは水かさ多く、靴を脱いで、脛まで氷のように冷たい流れにつかり渡渉したが、その記憶が鮮明に蘇ってくる。

0840 Lone Pine Lake を左に見て通過。一マイル先の **Outpost Camp** へ一気に進む。

1000 **Outpost Camp** を通過。キャンプ数は少なし。**Mirror Lake** を右に、湖の風景をユックリと楽しむことなく足早に1030通過。

これからが登りの難所、不ぞろいな岩石の道を行く。背中の荷物の加重（15キログラム）をもろに感じながら一步一步登る。最新のバックパックを買ったお陰で、肩への負担は少ない。1200 Lone pine Creek の小川に沿った草原に到着。

30分の小休止に入り、草原に寝転がって一睡す。

**Trail Side Meadow** から **Trail Camp** まで、地図では1マイルの距離にあるが、細長い Creek に沿った草原は、どこが **Trail Side Meadow** か明確でない。

いずれにしる、それから更に3時間のゆるい登りを経て **Trail Camp** に到着する。

左眼下には、この登山道近くで一番大きな湖 **Consultation Lake** がオパール色の湖水をたたえている。この湖が見えた後のキャンプ場までも長い道のり。1500

やっとアタックキャンプ場 (**Trail Camp**) に到着するも、先着キャンプ数は思ったより少ない。キャンプ場の小さな湖から少し南寄り、登山道をはさんだ場所を今夜のテント場とする。登頂中の食料は全てベアキャンの中に入れるべし、とのレンジャーの言に従って、急遽かさの張るインスタントラーメンを夕食とする。

あわせてジャーキーなどのたんぱく質を取る。

長い登り道に担いだ重いパックのため、細ブチ隊長が左足ももの部分に異常を訴える。翌日の登頂と合わせて長い撤収経路を考えると、体力を温存するため、明日の登頂を断念したいと言う。明日未明に起床した時の状態で判断しようとの結論にいたり、ひとまず就寝。小川先生は隣の2人用キャンプで就寝。我々は3人用キャンプで寝る。夜中の雨を考慮して、全ての装備をキャンプの中に入れると、3人用キャンプはスペースぎりぎり。これから判断して、単独行の場合も一人用よりは2人用テントがいいとの結論。

キャンプ場に到着後、キャンプの展張・夕食作業は、気は焦るが全ての行動がのろのろ。これが酸素不足の影響か。この高度で地上より1/3は薄い酸素量である。こちらののろい動作を狙って、敏捷なリスが出してある食料のビニール袋をかじりに来る。

近くの湖から明日の飲み水を確保する。小さな藻類が湖底にはびこりそれがふわふわと水面にも浮かんでいるが、レンジャーの助言では藻は汲み取らないことと。水の保有は1リッタービン2本と750CCビン一本を所持してキャンプ場まで登ってきたが、丸一日、10時間程度の山行きでは、これで十分と判断される。キャンプ場から西を望むと、明日未明に登るガレ山の向うに、あたかも屏風のように神々しい峰峰がキャンプ場を取り囲んで見下ろしている。一見パイプオルガンのような岩の壁を眺めえいると、荘厳ミサ曲などが聴こえてきそうな錯覚に陥

る。日没後は満天雲なく星空が頭上一杯。懐かしい見慣れた星座がはっきりと見える。



狭い3人用のテントにぶち隊長は早々と就寝。文ちゃん先生もウイスキーミニボトルの音をカチャカチャさせながら、窮屈そうに横になっている。私は明日の水を湖から補給して消毒薬を仕込み一番後にテントに入る。夜中3人とも寝られず、ごそごと寝返りを打つのが判る。

ぶち隊長は腿の痛さから、寝言のように「痛い」とつぶやいている。それを聞くにつけ、明日の登頂は万一3人だけでも実行せねば、との覚悟が出来る。

8月30日（金）

0300起床、隣のテントから目覚まし時計のジリジリという音が聴こえてくる。テント内壁は結露でびしょり。幸いテント内張りのみで、装備品までは濡れていない。昨夜は思ったより暖かなテント内であった。用心のため、羽毛のヤッケ、ズボン下、それにほかほかカイロを装着してスリーピングバッグにもぐりこんだが。

改めて、ぶち隊長に朝の体調を確かめる。「テント撤収後の長い下りに体力を温存するため、登頂は断念する」との言に従い、文ちゃん先生、小川先生、わたし

の3人隊と決定する。事前に地図・ビデオなどでコースを研究してあったので、不安感はない。天候急変によるアクシデントのみが不確定要素である。

0420ぶち隊長に見送られて登頂開始。文ちゃん先生がトップをきるも、途中でわたしと交代。ヘッドランプの光を頼りに、脚下のみを見ながら黙々と100曲がりを登る。

高所キャンプ場での一泊が高度順応に効果があり、一番の難所と覚悟していた100曲がりのスイッチバックは、スムーズに足が運ぶ。渇水期にもかかわらず、途中湧き水のスポットを3～4回横切る。鎖場ならぬ針金を張った難所も不安なく通過。その難所の道端の岩の上に、誰が置いたのか小さな鶏の卵大の布袋さんの置物が、歩行者の方を向いて鎮座している。登山者の安全を祈願してのものともみて、お参りしながら通り過ぎる。下山時も無事の登頂を感謝して布袋さんに頭を下げる。

一番の難所と覚悟していた100曲がりスイッチバックは、比較的地面の状態もよく、2時間チョットで2.2マイルの距離540メートルの高度差を克服して、Trail Crestに0645到着。

拍子抜けするほど楽な登りの理由は、一つにヘッドランプ頼りで回りの景色がまったく見えず、足下のみ見て進んだため、心理的に大変楽であったこと。さらにディパックの軽装だったことが挙げられよう。登山の疲労度は、心理面が大きく影響することを改めて感じた。今登ってきた漆黒の闇の中にポツリポツリと後続者のヘッドランプが見える。あたかも、月も無い暗夜の海上にあって、遠くに船のマストランプが灯っているがごとき、懐かしい錯覚を覚える。

高度4、200MのTrail Crestからは花崗岩の切り立った岩壁尾根を右上に見上げながら尾根の中腹を切りこんだゴロゴロした岩道を進む。時に左側に大きく切れ落ちるところもあったが、通過時の恐怖感は無かった。しかし、そのような場所を通過する際は、お互いに声を掛け合って注意を喚起した。

左眼下にはHitchcock LakesとGuitar Lakeが遠望できる。二つの湖を上から眺めると、スリラー映画監督のヒッチコックの横顔、楽器のギターの格好をしているので付けられた名前。

さらにGuitar Lakeに沿って、John Muir Trailが西へ細く延々と伸びている。

このJohn Muir Trailは我々が登ってきたMt. Whitney Trailと合流して、合流地点からMt. Whitney頂上まではJohn Muir Trailの名前となって続く。

Trail CrestからMt. Whitney頂上までの尾根下道は岩場の連続ではあるが、3人ともそれぞれ両手のポールを併用して、足への負担を出来るだけ少なくし、また不安定な岩場はポールでバランスを取りながら進んだ。高低差が少ないだけに、岩場の歩行を得意とする敏捷な若者達は、水ボトル一つを持った軽装で、我々の脇をヒョイヒョイと走るように進んでいく。

われら3人組は“Take it slow and easy, one step at a time!”のモットーに徹して、Trail Crestから2.5マイルの距離を2時間40分掛けて歩き、山頂には0928時に到着した。

山頂への最後のアプローチは他の山々とは異なり、山小屋が視野に入った途端、短時間で山頂に到達することが出来たのは、心理的には随分楽であった。

山頂は比較的広く、思ったより登頂者は少ない。小さな石造りの小屋があり、登頂者のサイン帖が頑丈な鉄の箱の中に納まっている。それぞれサインを済ます。この記録はオフィシャルなものとして残される。







午前11時をすぎると、上昇気流によって天候悪化の恐れがあるため、頂上で長居をするパーティはほとんど無く、気が付いたら到着した時に居たグループは、ほとんど下山していた。

2年前の頂上アタックの際、頂上から麓へ電話が通じたとのことだったので、小川先生が早速トライ。ラッキーにもご主人と通話が可能であった！眼下にローンパインの街が見えるので、時には通話可能となるのであろうか。

わずか30分の休憩後、1000そそくさと下山道に向かう。西の遠い空には、灰色の層雲・積乱雲も発生している。1200にTrail Crestを通過。下山中、こ

れから登るパーティと絶えずすれ違う。「あとチョット！」などと励ましながら、道を譲ってすれ違う。山のマナーでは登り優先では有るが、人によってはチョットでも休みたいため、降りてくる人に優先権を与えて、自分は一休み、嬉しそうな顔をして道端で待っている。

Trail Crest から、ブチ隊長の待っているキャンプ地まで2. 2マイルのジグザグ下り道を3時間掛けて降り、予定より2時間遅れの1500に到着。  
ホイットニー頂上からキャンプ地までの4. 7マイルを登りと同じ時間、合計5時間掛けて下ったことになる。

後述するが、我々が下山した2日後にトーレンス在住の日本人夫婦が登頂。そのうち60歳の男性が、下山時に登山道からがけ下に滑落死した。そのニュースを見るにつけ、山の潜在的な危険性を改めて認識して身が引き締まる思いがした。

ぶち隊長より祝福をうけて、トレイルキャンプに到着後、カレーライスを食べながら、テントの撤収・荷物の整理、水の補給と休むまもなく身体を動かす。作業中わずかにポツリポツリときたが、雨足が大きくならずに済んだのは、自称晴れ女小川先生のお陰と感謝。

キャンプ地に運び上げた食料の中でも重いオニギリが残り、改めてパッキングするのはなんとも辛いことであった。自然環境、小動物などの保護の観点から、ごみは一切後に残すことは許されない。昨日来た道を食べ残した食料、ごみ類をパッキングして、持ち帰るのは心理的にもずっしりと肩に應えるものがあった。

Outpost Camp を1900~1930に通過。丁度日没時とあって、薄暗くなりかけの開けたキャンプ地の中を黙々と進む。キャンプ地に入った途端に、一人の男性が前方から現れ、(キャンプ場を管理している業者か) 先は長いから、ここで一泊して行かないかと誘う。確かに登り口 Trail Head までは3.5マイルもある。このスピードで降りれば、到着は夜11時近くなる計算。しかし業者の誘惑を振り切って、小休止後更にMeadowの中の道を小川に沿って進む。昼間なら鼻歌交じりで野鳥の声を聞きながら楽しく歩けそうな道も、今はただ一歩一歩足を前に出すのみ。この辺りはほとんどお互いに会話も交わさずに、黙々と歩きとおした所であった。はるか眼下にはWhitney Portalの駐車場の自動車のヘッドライトが時々見え隠れする。

途中小休止の際、文ちゃん先生の大きな叫び声が暗闇から聞こえてきた。一瞬ハッと身構えた。急いで傍へよると、文ちゃん先生のパッキングから寝袋が転げだし、登山道の下、林の中に落ちてしまったとのこと。しかし暗闇のため回収は困難。その瞬間に脳裏をよぎったのは、寝袋が人身御供となって、文ちゃん先生の身替わりになり、がけ下の林の中に落ちていったのだという変な考えであった。後からきくと、誰もがそう思ったとのこと。それほど疲労困憊の下り道であった。今度の山行き全体を改めて振り返ってみて、アクシデントのためハッと一瞬身構えたのは、あとにも先にもこれ一回のみであった。

一日前に涉ってきた丸木橋、飛び石伝いのクリークを超えると、あとはただ歩くのみ。スイッチバックの夜道を、歩けど歩けど駐車場にたどり着かず、疲労困憊して Portal に到着したのは、予測どおり 2300 丁度であった。

早速一同 Human waste を収納するボックスに向かう。鼻をつまんで蓋を開けるように、とのアドバイスがあったので、息を殺して蓋を開け、持ち帰ったビニール袋を放り込んだ。

駐車場には昨日のままの車が一向を待っていたが、人影は車の往来を含めて皆無。しかし駐車中の車には、未明の登山を控えて仮寝をしている人も居たことであろう。静かに軽い屈伸運動をすませて乗車。Lone Pine への 13 マイルの山道を、途中 Deer Crossing の注意板もあり、最大の注意を払って運転する。幸い対向車にはほとんど出会わず、日付が変わる前にはモーテルに到着。心配した部屋もちゃんと確保されていて一安心。

一軒だけ開いているマクドナルドでハンバーグをテイクアウトして、小川先生の部屋に集まり、午前 1 時ごろからコーヒー、ジュースで乾杯！！一同無事の帰還を祝う。各自の部屋へ帰っての就寝は 2 時過ぎとなる。

ブチ隊長は、ご自身の好判断が功を奏し、左腿も下山時には何事も無く、また文ちゃん先生、小川先生も頂上への登り降りを含め、合計 17 時間の行進を無事に終えることが出来た。文明の利器にかこまれ安全なモーテルのベッドで疲れた身体をユックリと休ませることが出来たのは、誠に幸いであった。

8 月 31 日 (土)

朝 8 時過ぎにブチ隊長は早々と近所の温泉に向けて出発。ただし、あとから聞くと温泉は閉鎖されていたとのこと。

文ちゃん先生は、夕方催されるグリーの慰問コンサートに参加すべく、ユニホームのポロシャツを来て、張り切って食堂に現れる。3 人で 8 時 30 分からの朝食を終えたあと、一昨日来た道を LA に向けて、途中休憩も無く、達成感に満たされてただひた走る。加重が掛かった右肩が少し痛い程度で、あとは大したことは無い。

午後 1 時ごろ予定通り帰着。マリナデルレイより、小川先生はご主人の車に乗り換えて帰宅される。

早速、体重を量ると 3 キロ近く減少していた。モーテル To モーテル 2 日間に約 6 万歩も歩いたのだから、体重の減少もさにあらん。

今回のホイットニー登頂成功は、なんと言ってもブチ隊長の一年以上前からの、周到な計画とその実行によって成就されたものといって間違いない。本当に感謝である。

更に、自らの体調と翌日の撤収ルートを考慮して、登頂を断念する決断をされたことは、一緒に行ったわたし達に、下山に当たっての体力温存が如何に大切か、身を持って教示してくれた。

また、最も心配されたことのひとつ高山病も、事前の対処で上手く乗り切れたのはドクター文ちゃん先生のお陰であった。さらに、体調の変化にたいして、それぞれの確・具体的説明・アドバイスをいただき、それを聞くだけで安心することが出来た。

小川先生はほとんどのコースを先頭から2番目に付いて歩かれた。いつもピタリと一定間隔をおいてついて来られるので、私にとって歩行のペース配分が大変やり易かった。また、最も難しいことの一つである食料購入を担当された。特記事項は、再三述べたように、ほんの数粒の雨を降らしただけの晴れ女の面目躍如たることを、今回も証明されたことである。山の中にあつて、一たび悪天候に遭遇すれば、全ての状況はまったく違ったものになってしまう。

最後に、人はなぜ山に登るのか？との質問をよく聴く。

“そこに山があるからー”と言う有名な答えは、応えになっているようではない。

わたしにとって山に登る魅力は、「自然は、自分が手抜きしない限り決して裏切らない。」に尽きる。そこが下界の人間社会との大きな違い。自然の猛威、恐ろしさ、偉大さ、包容力、変幻自在などなど、表現しきれない魅力がある。それらと誠実に対面する時、自然は決してうらぎることはないと信じている。自然から手痛いしっぺ返しを食らうのは、いつもこちらに何らかの手抜き・慢心があるからだ。

以上

「参加者」

隊長：細渕巖

隊員：永川文一

小川弘子

斎藤泰

「附」

羅府新報9月5日号より

TORRANCE MAN DIES AFTER CLIMBING Mt. WHITNEY

Yukio Kato, 60, falls over cliff from trail in Sequoia National Park.

Sequoia National Park – On Monday, the body of Yukio Kato, a 60-year-old man from Torrance, was recovered in Sequoia National Park by the National Park Service, in cooperation with the Inyo County Sheriff's Office, Inyo National Forest, and Tulare County Sheriff's Office.

Kato fell approximately 200 feet over a cliff from the Mount Whitney Trail to his death on Sept. 1 at approximately 1:30 p.m. The incident happened approximately a mile from Mount Whitney at 13,500 feet above sea level while he was on the way back to the Whitney Portal trailhead.

Earlier in the day, Kato and three other people hiked from the Whitney Portal trailhead in the Inyo National Forest to the summit of Mount Whitney.

He was at about 13,500 feet in elevation when he fell. Mount Whitney is the highest point in the United States outside of Alaska.

The Dispatch Office at Sequoia and Kings Canyon National Parks received the initial report of the incident from the Inyo County Sheriff's Department at approximately 3:30 p.m. on Sunday. At approximately 4:40 p.m. the same day, the National Park Service dispatched a contract helicopter and a park medic to the accident scene, while nearby U.S. Forest Service wilderness rangers walked with other members of the hiking party back to the Whitney Portal trailhead.

Due to limited daylight hours, the body recovery was scheduled for Monday. A mountaineering technical rescue team of four park rangers from Sequoia and Kings Canyon National Parks was sent to recover the body.

The cause of the fall is under investigation. Weather is not considered to be a factor.

End